

以前事言及のシテイルについて

——日本語のアスペクト論を問う一視点として——

張 平

桜美林大学グローバル・コミュニケーション学群

On the Theories about Aspect Form shiteiru (シテイル)
in Japanese Language

ZHANG ping

College of Global Communication, J. F. Oberlin University

キーワード：スルとシテイル、言語活動、対立の関係、発生と存在

要旨

日本語のアスペクトの研究は、奥田 1977 を境にそれ以前と以降に分けることができる。奥田はスルとシテイルを対立的関係にあるアスペクト形式ととらえ、両者の基本的なアスペクトの意味としてスルは完成相、シテイルは継続相を表わすとした。奥田は動詞のアスペクトとしてスルとシテイルのアスペクトの意味を観察している。この立場は奥田以前のアスペクト論の流れを継承したものである。奥田はシテイルのアスペクトの意味を動詞の語彙の意味特徴によって、動作を表わす動詞にシテイルが使われた場合は「動作の継続」、変化を表わす動詞に用いられた場合は「変化の結果の継続」とした。両者の共通項である「継続」を取り出して、シテイルのアスペクトの意味と認め、シテイルの対立面にあるスルのアスペクトの意味を「完成」とし、スルとシテイルのアスペクトの意味を「継続相」「完成相」と規定した。奥田のアスペクト理論はそれ以降の研究で指導的なものとなっている。

対立的関係においてスルとシテイルのアスペクトの意味をとらえるべきとする観点には賛成であるが、筆者が疑問に思うのは、スルとシテイルのアスペクトの意味をとらえるには、言語表現の現場において、文法的にも文体的にもスルを選ぶべきか、シテイルを選ぶべきか、という実際の言語活動における対立関係の観

点に立って観察すべきではないかという点である。これは奥田 1977 に述べられている観点でもある。このような観点に立つとすれば、スルかシテイルかの選択は動詞の語彙的意味特徴という語彙レベルを越えて、センテンスやテキストのレベルにおいて観察するのが正しいアプローチではないか。このような観察によって、スルの意味を発生、シテイルの意味を存在とする仮説を立てることができ、この仮説によれば、以前事言及のシテイルをアスペクト論の射程におさめることができることを論証しようと試みたのが本論である。

具体的な言語活動において動詞の語彙的意味や述語の統語構造、発話の内容及びテキストを含む文脈などの要素との関わりによって観察されるアスペクト的な意味特徴を類型化し、スルの発生、シテイルの存在に包括される下位概念として分類するアスペクト論の提案につなげていきたい。このような構想のもとで行う一つの試みである。

1. はじめに

アスペクトに関する奥田理論に立脚する研究では通常、動作動詞の場合は(1)「動作の継続」、変化動詞の場合は(2)「変化結果の継続」をシテイルの基本的なアスペクトの意味とする¹。

(1) 太郎は本を読んでいる。

(2) 太郎は大学を卒業している。

(3)「反復」、(4)「単なる状態」、(5)「パーフェクト」はシテイルの派生的なアスペクトの意味とされる。

(3) 太郎は休みの時いつも本を読んでいる。

(4) 道が曲がっている。

(5) 太郎はすでに大学を卒業している。

(5) は「パーフェクト」のほかに「経験・記録」「出来事の完成」「出来事の質化」とするなど、研究者によって見方が異なる。「出来事の完成」「出来事の質化」とするのは高橋 1985 であるが、高橋は(5)のシテイルを非アスペクト形式としている。「パーフェクト」説を採る工藤 1995 と須田 2010 は前者がアスペクト形式と認め、後者はアスペクト形式と認めない²。

本論では、(5)のシテイルを「出来事の完成」「出来事の質化」とする高橋 1985 を取り

上げ、私見を述べていくことになるが、(5)のシテイルの用法の実態を特徴づける側面を示す名づけを考え、「以前事言及のシテイル」と仮称することにする。

ところで、(1)に「休みの時いつも」という成分が加わったのが(3)であり、(2)に「すでに」が付いたのが(5)である。(3)の用法が「反復」、(5)の用法が「経験・記録」「出来事の完成・質化」「パーフェクト」とされるのは、述部の統語構造という構文的要素によるものであることは容易に理解される。(3)の「休みの時いつも」は運動の時間的ありかたを表わす状況成分、(5)の「すでに」はある時点以前に出来事の完成したことを表わす状況成分である。(4)を「単なる状態」とするのは、最初から曲がっている、という経験的想定によるものである。(3)(4)(5)と(1)(2)では、意味記述のアプローチが異なることが明らかである。(3)と(5)は述部の統語構造、(4)は表現対象の在り方、(1)と(2)は動詞の語彙的意味というように、それらの意味記述は、同一のカテゴリーに属する事象を同じ視点から観察することによって行われたものでない。方法論的な省察を欠くところがあったと指摘したい。

奥田アスペクト理論に立ち返って見ると、動詞の語彙的意味特徴に基づく観察によって得られた「動作の継続」「変化結果の継続」という二つのアスペクトの意味から共通点である「継続」を取り出してシテイルのアスペクトの基本的な意味と規定する方法を、「ぼくたちは、自分自身の言語活動において、文法的にも文体的にも、*suru*をえらぶべきか、*shite-iru*をえらぶべきかという、実際的な問題にぶつかる」と述べる場所に示されている奥田1977の提示したアスペクト研究の方法論の原点に照合してみた場合、両者の間に方法論的な齟齬がうかがわれる。

以前事言及のシテイルに関する詳細な議論を展開した高橋1985、工藤1995と須田2010はいずれも奥田理論に立脚する研究成果であるが、見解は大きく異なっている。(5)のシテイルをパーフェクトととらえる点では、工藤1995と須田2010は共通するが、工藤は継続相の派生的なアスペクトの意味とする。一方、須田はパーフェクト説を採用しつつも、アスペクトの意味とは認めず、アスペクト形式であるシテイルとパーフェクト形式であるシテイルというように二つのシテイルに分け、同形異義のシテイルを認める立場を示している。工藤と須田に先行する高橋は以前事言及のシテイルの用法に形式と意味との不整合を明確に指摘している。高橋の議論はこの「不整合」と正面から向き合い、この「不整合」に合理的な解釈を与えることを出発点にしている。筆者はこの点を高く評価したい。しかし、高橋は奥田のアスペクト論を疑ってみようとしなかった。奥田のアスペクト論を前提条件とし、この前提条件に整合するように解釈を行った。その姿勢は以前事言及のシテイルを「完成相のテンス形式に準じる継続相」と規定するところにも窺い知ることができる。詳細は後述することになるが、シテイル形の場合はアスペクトとテンスから解放されるとし、アスペクト形式のシテイルと区別し、完成相過去形のシタに相当する形式として「して+いる・いた」を見ようとしている。一方、シテイタの場合はテンスの機能が働いているとし、テンスの意味を認めている。

高橋 1985、工藤 1995、須田 2010 はいずれも体系的な研究を目指したもので、膨大な量の観察と多方面にわたる議論が行われている。本論では奥田のアスペクト論に立脚し、以前事言及のシテイルの用法に形式と意味との「不整合」を認め、それを出発点とする高橋 1985 の指摘した問題点、それをめぐる議論、仮説を吟味し、議論を進めていく。工藤と須田の論述については他日を期したい。

本論は基本的に三つの節から構成されている。高橋以前の研究を概観するのが最初の節である。この節では完成相・継続相の認定を中核とする奥田 1977 のアスペクト論について「動詞のアスペクト論」である点においてはそれが方法論の問題として従前の研究を継承したものであるということを確認する。第二の節では高橋の議論との対話を通して卑見を述べていく。三節目は以前事言及のシテイル文をシタ文と比較し私見を検証する。

2. 高橋 1985 までの所説の概観

高橋 1985 以前のアスペクト研究でこの事象に触れた議論には金田一 1955、鈴木 1957、藤井 1966、鈴木 1972 が見られる。

2.1 金田一 1955 の指摘 (p.34-37)

金田一 1955 は「動作相のテンス」の「完了態」についての議論で、継続動詞に「た」が付いた「読んだ」「書いた」には継続的という意味はなく、完了態を表わすのだが、「書いている」の「書く」は書写中の意味であれば「継続動詞」、「あの人はたくさんの小説を書いている」という場合には「継続動詞としての意味を無視して」、「臨時に瞬間動詞として用いられている」と述べている (p.36-37)。これ以上の議論はないが、(6、7) のように、この指摘は構文的要素によって動詞のアスペクトの意味が変わることを気づかせるものである。

- (6) あの人は小説を書いている。(継続)
- (7) あの人はたくさんの小説を書いている。(完了)

2.2 鈴木 1957 の「経験ずみ」説 (p.68-71)

鈴木 1957 (p.70) は、(8-10) における継続性動詞の持続態非過去であるシテイルを、「変化全体を表わす」「瞬間性動詞と同じように、現在(特定の未来、特定の過去)以前に経験ずみであることを表わす」用法ととらえている。

- (8) 「野田さん、貴方がた、だれか、そういう場面を見たのですか?」「ハイ、下級生が何人も見ております。～」
- (9) 「～、分けて、お前さんは全盛だ。名だけは評判で聞いて居る。～」

- (10) 実は此間から大学の図書館で、少しずつ本を借りて読むが、どんな本を借りても、必ずだれか目を通している。(8-10は鈴木1957 p.79)

「継続性動詞」と「瞬間性動詞」の語彙的な意味特徴に着目する鈴木 of 観察は、金田一と共通する立場に立つものである。

2.3 藤井1966の「経験」説 (p.105-07)

藤井1966は「「経験」について」(p.105-107)という一章を設けて、この問題を正面から取り上げた。鈴木と同様に「経験」を表わす用法ととらえる藤井の観察は、動詞の語彙的意味特徴との関わりに軸足を置いているが、文の構成要素や統語構造にも視野を広めている。「あの人はたくさんの小説を書いている」という事例に象徴される用法に触れて、(11)の瞬間動詞が表わす「結果の残存」は現在の状況を指し、「現在」を付けることができるが、過去の動作・作用を現在の視点から関心をもって見る継続動詞の「たくさんの小説を書いている」は(12)の示すように「現在」を付けるができないと述べ、アスペクトの意味の違いをもたらす原因を動詞の語彙的意味特徴以外に求め、両者を区別し、金田一の臨時瞬間動詞説を退けている。

- (11) あの人は現在結婚している。
(12) *現在たくさんの小説を書いている。

また、瞬間動詞であっても(13)は過去の動作・作用が現在にもたらした結果には関心がなく、過去の動作・作用そのもののみ関心を寄せているので、「経験」を表わす用法とする観察も、構文的要素や統語構造とのかかわりを視野に入れている。

- (13) 彼は昭和十五年に結婚している。

継続動詞であっても「結果の残存」を表わす(14)のような表現もあるという指摘も観察の視野を動詞の語彙的意味特徴の外に広げた新たな発見である³。

- (14) 地面に花が散っている。

ちなみに、瞬間動詞であっても「結果の残存」ではなく、「経験」を表わす(15)は動詞の語彙的意味特徴によるものだが、(16)のように構文操作をすれば反復の意味を表わす用法になる。

- (15) 一瞥している。(11-15は藤井1966 p.105-106)

(16) 太郎は花子が現れるたびにこっそりと一瞥している。

「動詞＋ている」の表わす時間的な意味と動詞の語彙的意味特徴とのかかわりについての考察を目的とする藤井 1955 の立場からすれば、当然の帰結であるが、藤井は、継続動詞か瞬間動詞かという区別に関係なく、「結果の残存」を表わす動詞と表わさない動詞があるという発見から、結果動詞か非結果動詞かという動詞の語彙的意味特徴によって動詞全体を二分することを提案している。

2.4 鈴木 1972 の「経験・記録」説 (p.367-383)

鈴木 1972 (p.377-383) は、動詞の語彙的意味特徴によってシテイルの意味を「進行中の状態」「結果の状態」「くりかえしの状態」「経験・記録」と4分類し、(17-19)を「以前の動きを経験や記録としてあらわすもの」とする。

(17) かれは二十代に画期的な論文をかいている。

(18) かれは去年の三月に彼女と結婚しています。

(19) かれはこれまでに保証人のことでなんどもひどい目にあっています。(17-19は鈴木 1972 p.383)

藤井は「経験」を「結果の残存」と区別したが、鈴木は鈴木 1957 の考えを踏襲し「経験・記録」を「結果の状態」の派生と見ている。

2.5 奥田アスペクト論の方法論的問題

前述の概観で明らかのように、それらの議論はシテイルのアスペクトの意味を動詞の問題として扱い、動詞の語彙的意味特徴によって観察し、規定するという基本的な立場に立ちつつ、必要に応じて構文的要素にも目配りをするという方法論的な態度を取っていることがうかがわれる。この姿勢は「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」と題する奥田 1977 の論文においても継承されていると指摘したい。奥田はその論文で、「ぼくたちは、自分自身の言語活動において、文法的にも文体的にも、suruをえらぶか、shite-iruをえらぶべきかという、実際的な問題にぶつかる」(p.206)と述べている。この問題意識はスルとシテイルのアスペクトの意味を両者の対立的関係においてとらえるべきだという方法論の発見に結実したのであるが、スルとシテイルのアスペクトの意味の観察はこの言語活動における「実際的な問題」からは出発していない。

奥田アスペクト論も従前同様に、動詞の語彙的意味特徴によって観察されるアスペクトの意味の違いによって動詞の分類を行うことに基本的な関心が置かれているのである。スルとシテイルのアスペクトの意味を両者の対立的関係においてとらえようとしていない「金田一的段階」のアスペクト研究を批判する議論として展開された奥田 1977 におけるア

スペクトの意味の観察は、スルとシテイルの対立的関係の発見に至ったのであるが、動詞がシテイルを選んだ時に観察される「継続」の意味に、スルを選択した際に観察される「完成」の意味を対置することによって生まれた奥田アスペクト論は、動作動詞のシテイル形は「動作の継続」、変化動詞のシテイル形は「変化の結果の継続」を表わすとするところに見られるように、「言語活動」以前の、動詞という語彙レベルに留まるもので、この限りにおいては「金田一的段階」のアスペクト研究の流れをくむものといわざるを得ない。

3. 高橋 1985 の問題意識と議論 (p.219-236)

この節では、奥田のアスペクトの理論に立脚し、テンス・アスペクトの体系的な研究を目指した高橋 1985 で展開される以前事言及のシテイルに関する議論を吟味しつつ卑見を述べてみる。

3.1 形式と意味の不整合

以前事言及のシテイルをめぐる高橋 1985 の議論は以前事言及のシテイルに見られる形式と意味との不整合の指摘からスターしている。

継続相「している」「していた」は、ほんらい継続相アスペクト、つまり、動詞のあらかず動作をその一定の局面のなかにあるすがたでさしだすというアスペクト的な意味をもつ形式である。ところが、この形式は、一定の時以前に、動詞のあらかず動作またはその一定の局面がまるごとのすがたで完成したというテンス・アスペクト的な意味をあらかず形式として、はたらくことがある。(p.219) (下線は筆者による)

下線部の示すように、継続相を表わすシテイルがある時点以前の出来事を表わす時、継続相の対極である完成相の意味を表わしているという不整合が指摘されている。高橋 1985 の部立てのタイトル名である「完成相のテンス形式に準じる継続相」、その下位の章立てのタイトル名である「完成相あわせテンス形に相当する継続相」のいずれもこの不整合を尖鋭に露顕させている。この不整合は、高橋 1985 にとってはその拠るところの奥田理論の射程外にもシテイルの用法があることを示し、理論の限界を露呈する事象となっている。高橋はさらにタイトル名について次のように説明している。

完成相の絶対的なテンスをあらかず語形は、「する」「した」のように総合形式のでつづきでつくられるが、この相対的テンスをあらかず形式は、「して」と、「いる」または「いた」とがくみあわさる分析形式としてつくられる。あわせテンス形に相当するというのは、分析形によってつくられるテンス形式に相当するという意味である。このあわせ形式は、継続相の形式と同じである。したがって、この形式をおもんじて、

継続相のひとつの用法としてとらえることにする。そして、意味的にテンス形式に準ずるものとして、この部のタイトルのようなかたちで、この形式を名づけた。(p.219) (下線は筆者による)

つまり、「する」「した」が「完成相の絶対的なテンスをあらわす語形」であるのに対し、「して+いる」「して+いた」は「相対的テンスをあらわす形式」であるという認識を示しているのである。そして、「このあわせ形式」は「継続相の形式と同じである。」という。つまり「する+いる・いた」は相対的テンスをあらわす形式であるが、継続相のシテイルとは別物だという見解を示しているわけである。この見解は、以前事言及のシテイルに見る形式と意味の不整合を解釈する高橋の結論でもある。

この見解はいみじくも、日本語のスル・シテイルの意味を既存のアスペクト理論に基づいて観察する立場を選ぶか、それとも日本語の言語活動の実際に立脚して観察する立場を取るか、という研究の方法論的な選択を迫るものでもある。本論は後者の立場に立つ観察を目指す試みの一つである。

3.2 「経験・記録」説への批判

高橋は「記録」については「文書上の記録に結び付けなくてもよい」と言い、「経験」については「現在と「なんらかのかかわり」という、その内容がはっきりしない」(p.221)として、「経験・記録」説を退けた。(22)の「大学出である」に言い換えることのできる(20)の「卒業している」を「その経験が経歴として現在のむすこの質的な属性」(p.221) (下線は筆者による)を表わすとし⁴、(22)への言い換えのできない(21)を「現在」ではなく、「現在以前」を表わすとして、現在の質的属性でもなければ現在の記録でもない(21)を、出来事を述べる表現と認め、(20)と区別した。

(20) むすこは大学を卒業している。

(21) むすこはすでに大学を卒業している。

(22) むすこは大学出である。(20-22は高橋1985p.221)

上述の高橋の観察と指摘は頷けるものであるが、しかし、「すでに」の有無によってもたらされる(21)と(20)の違いは上述のような表現上のものにはとどまらない。高橋の理論によれば「すでに」が付くことによって(21)のシテイルはアスペクトの定義の対象から外れるのである。

3.3 アスペクト説

高橋の説明によれば、「テンス的にシノニムであることが、その形式の内容を分化させる力として働いた」として、そのために「この「している」の形は、アスペクトから解放

されて、質をあらわすものへと移行してくる」(p.222)ということなる。また、過去の出来事であることから、非過去形のシテイルはテンスからも解放されているとした。通常の論理からすれば、シテイルとスルのどちらを選んでも意味が変わらないか、シテイルとスルのどちらか片方しか選べない場合は、アスペクトの意味を持たない用法と認定され、アスペクトから解放された用法ということになる。テンスからの解放と認定するにも同様の論理による。しかし、(21)と(23、24)を比較すれば分かるように、シテイルとシタとの違いも、シテイルとシテイタとの違いも明瞭である。この違いは次の(26、28)にも認められる。テンス・アスペクトからの解放とする高橋の説明には同調しがたい。

(23) むすこはすでに大学を卒業した。

(24) むすこはすでに大学を卒業していた。

奥田 1977 のいうように、言語活動においてスルを選ぶか、それともシテイルを選ぶべきかという実際の発話として、(25-28)のようにシタを用いた文とシテイルを用いた文とを対比し、どんな違いがあるかを観察してみよう。

(25) 今年の夏の大会は、A校が優勝した。

(26) 今年の夏の大会は、A校が優勝している。

(27) 彼は三年まえに一度離婚した。

(28) 彼は三年まえに一度離婚している。(25-28は高橋 1985 P.222)

シタを用いた(25、27)をみると、(25)はA校が優勝したことを出来事の発生として伝える発話であることが理解される。(27)は三年前に離婚したことを出来事の発生として伝えているのも了解される。では、シテイルを用いた(26、28)はどうであろうか。まず、言えることは、出来事の発生についての発話ではないという理解は共有されやすい認識であろう。A校が優勝したこと、離婚したことを出来事の発生に関心を寄せて発話しているのであれば、優勝、離婚といった出来事が発生したことを、存在することとして扱い、その存在に言及していると、(26、28)に用いられているシテイルの表現意図をそのように読み取れないだろうか。発生に対置する概念としての存在である。

言うなれば、発生した出来事を発話の素材とする際、その扱い方として、その発生を伝えるのか、それともその存在を伝えるのかという対立的選択における、スルか、シテイルかの、二者択一である。スルに対応する「発生」も、シテイルに対応する「存在」も、両者ともに相手の存在を前提とする対立的関係性においてのみ自身の価値を実現する概念、言い換えれば相手との区別を示す示差的機能を持つ限りにおいてのみ自身の表現機能を実現しうる、いわば実体、もしくは実在的ではない、対立的関係性を本質とする抽象的で包括的な概念である。

3.4 方法論の問題として

過去に成立したことをその発生に関心の焦点を当てて伝えるのか、それとも、その存在を伝えることに発話の意図を置くのか、この二者択一的な、対立的、示差的な関係においてそれぞれの存在価値、表現機能、形式に対応する概念（意味）が実現し、保持されるものとする。この考えは観察や意味記述を行う際の方法論の問題である。

高橋は、「ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた」(p.225)である継続相の用法(33、34)と比較することによって、(29-32)のシテイルは「現在以前に動作なりできごととなりがるごとのすがたで完成したことをあらわす」と見て、「現在以前における動作の完成」と名付けた。(33、34)のシテイルは、完成を表わす点では(29-32)と共通するが、「動作の変化過程がおわったことをあらわしている」と同時に「現在、持続過程をなす変化結果の局面のなかにあることをあらわしている」のだが、それと違って、(29-32)のシテイルは「結果の局面は問題にされておらず、動作の全過程が完成したものととしてさしだされている」と両者の違いを説明している。

(29) 一雄君、君は横領もやってるね。

(30) 6回の表、印旛高校が待望の先取点をあげています。

(31) 連中は、重臣をすでに六人もころしている。

(32) 真弓が今シーズンはやくも2本のホームランをうっています。(29-32は高橋1985 P.225)

(33) 業務がすではじまっている。

(34) 日ごろ、池氏愛用の望遠鏡も、長い道路をゆられたため、いたるところ故障を生じている。(29-34は高橋1985 p.225-226)

この比較は、同じシテイルでも意味が異なる場合があるということを証明するのには有効なものであるが、出来事が過去または以前に完成したことを表わすのに完成相過去形のシタを選ばず、継続相非過去形のシテイルを選ぶ理由の解明に応えたものとは言えない。もっとも、以前事言及のシテイルをアスペクト形式と見ない高橋の立場からすれば、アスペクト形式のシテイルと、非アスペクト形式のシテイルとの比較になるのだから、シタを選んだ文とシテイルを選んだ文の違いは関心の外かもしれない。

ともあれ、シタを用いた文と対比して(29-32)のシテイルの意味を観察してみよう。「横領もやったね」「待望の先取点をあげた」「すでに六人も殺した」「はやくも2本のホームランを打った」のようにシタを用いた文を作ってみると、これらの文はシタが用いられていることから、出来事の発生を伝えることに発話の意図を置いていることが見て取れる。これらのシタ文と対比して、(29-32)のシテイル文を見ると、出来事の発生したことを既存のもの、存在することとして当該の出来事に言及していることが了解される。出来事をとらえる姿勢や発話の意図、効果など諸方面にわたって、スルとシテイルに対応する意味、

示差的機能が観察されるのである。

3.5 「質化」と「存在」

高橋は、出来事が過去または以前に完成したことを表わすシテイルの用法の一つとして、「質化」と見ているのは前述のとおりであるが、(35-39)もその用例である。これらの用例におけるシテイルの用法を、高橋は「現在以前の動作やできごとの質化」と名付けているが、前節の「現在以前における動作の完成」を表わす用法は「「すでに」「とくに」などの状況語との共起という構造にしばられることが多い」(p.227)という特徴と比較して、(35-39)におけるシテイルの用法には「すでに」を付けることができいという構文上の違いを指摘している。

- (35) マキャベリの「君主論」イタリア・ルネサンスの先駆をなすフレンツェ自由都市のはつらつとした空気のなかで生れている。
- (36) 「ライフ誌」はアメリカ軍では特攻隊のことを「バカ」というアダナをつけていたことを報じている。
- (37) 2月6日15時羽田発日航311便は、大阪伊丹空港に定時の16時55分についています。これは、17時10分に福岡板付にむかってから、予定どおり、板附空港には19時10分についています。
- (38) 「その男はさいごまで一行と行動をともにしたでしょうか?」「いや、やはり途中で帰っています。」
- (39) きていました。私はその人が葬儀委員の二人とあいさつをかわしていたのをみています。(35-39)は高橋1985 p.226)

「すでに」と共起しない理由を、高橋は「以前のことであるということは強調されておらず、現在以前におこったそれは、そういうものであったということを述べているからである」(p.226)としている。この指摘には、「現在以前におこったそれは、そういうものであったということを述べている」という興味深い観察が含まれているが、それは後で述べることにして、ここでは「すでに」を付けることができるか否かはシテイルのアスペクト性に関わる問題でないことを指摘したい。なぜなら、(31-33)を「すでに六人もころした」、「はやくも2本のホームランをうった」、「業務がすでにはじまった」のように、「すでに」「はやくも」を付けたままシタ構文に変えることが可能だからである。また、(35-39)の用例の内容をよく見れば分かるように、これらの用例が「すでに」を受け付けないのは文の内容による制約と見るべきである。

(35-39)に用いられているシテイルの意味を観察するにも、シタに置き換えて両者を対比するのは有効な方法である。シタを用いた表現に変えてみると、出来事の発生したことを伝える発話になることが理解される。これとの比較でシテイルを用いた(34-37)を見

ると、出来事の発生したことが存在することとして表現されていることが見て取れよう。

シタかシテイルかという対立的関係において、シタ文とシテイル文を対比することによる観察によれば、出来事の「完成」と「質化」という2種類の用法に分けられた上述の用例(29-32)と(35-39)に用いられているシテイルの文法的な意味は、「発生」に対立する「存在」の意味が認められたという点では共通していることが確認されたと考える。シテイルを用いた文とシタを用いた文との対比によって、シテイルの意味を浮き彫りにすることができることも確認できたのではないかと考える。

ところで、高橋は「過去のできごとがそういうものであったことをのべているのである。動作が完成したことをのべているのではなく、そのような質であったことをのべている」(p.227)とも述べている。上述で興味深いと述べた観察はここでより明確に述べられている。箇条書きに列挙してみると、次の3点になる。

- ① 過去のできごとがそういうものであったことをのべている
- ② 動作が完成したことをのべているのではない
- ③ そのような質であったことをのべている

スルに対応する発生という概念に対置する概念として、シテイルに存在という概念を当てたように、シテイルは、出来事の発生したことを、その発生に関心を寄せて発話しているのではなく、存在することとして扱い、表現の素材として発話しているのだという解釈をしてきた。このような解釈で措定する発生の概念に、高橋の①②を重ねてみると、二つの図式は大方重なっているのではないかと気付かれよう。観察されたものが同定できても、観察の視点と意味記述の観点が異なれば、目に映る景色もその価値も違ってくる。シテイルのアスペクトの意味を運動や変化の過程に求める立場に立つ高橋のアスペクト論からすれば、過程という概念に対置する概念として、①②を完成した出来事の質化を意味するものと見るのは、当然の帰結といえる。

通常「質」という言葉は、「量の対立概念」「その事物に本来そなわっている特徴」「そのものの良否・粗密・傾向などを決めることになる性質」といった内包をもつ概念として理解されるのであるが、高橋のアスペクト論における「質」という言葉は当然、①②をその内包とする概念を表わすものと受け取るべきである。両者間には埋まらない溝があるのは明瞭なことであろう。

①「過去のできごとがそういうものであったことをのべている」のであって、②「動作が完成したことをのべているのではな」という観察は、以前事言及のシテイルの用法の本質を突いたものである。しかし、過程を表わす機能を実現しているシテイルはアスペクトの意味を持っているとし、過程を表わす機能を実現していないシテイルはアスペクトから解放されたとするアスペクトの論理からすれば、その価値が正当な評価を受けることなく、足踏み状態に止まっていると言わざるを得ない。このことから、スルとシテイルの

文法的意味を言語活動における対立関係において観察する立場を離れると迷走することを気づかされる。

3.6 にシテイタの用例について

高橋は以前事言及のシテイタにも、前節のシテイルと同様に出来事の完成と質化の用法を認めている。出来事の完成の用例(40-43)と、出来事の質化の用例(44-46)に用いられているシテイタに、「テンス的な意味がはたらいている」(p.232)と認めている。しかし、(43)を除けば、過去形のシテイタが用いられる意図、——シテイルとのテンス上の違いを観察するには、情報が不足している。

- (40) ところがこの二年前に、湯川秀樹氏が、それだけでは理論的にわりきれないとして、「中間子」の存在を予言していた。
- (41) 女たちは城を出るとき、重治に目通りしていた。女たちはそれだけで重治のために死ぬことを喜んでいるのだった。
- (42) 彼女は、《チャッターレー夫人の恋人》という本も、戦前によんでいた。(以上の用例は p.231)
- (43) ランナーがスタートをきっていました。そのために辻井もどることができませんで、ライトからファーストの吉村にかえてダブルプレー。(40-43は高橋1985 p.231)
- (44) ファウル。外角ストレートをねらいましたが、ちょっとふりおくれれておりました。
- (45) あたりはよかったが、レフト門田の正面をついておりました。
- (46) ファウル、ファウルです。わずかにバットにかすっておりました。(以上の用例は p.232)

(43)では、「スタートを切った」ことがこの後の展開の理由とされるところにシテイタのタ形が機能していると言える。しかし、この用例の場面でシテイタが用いられている理由は、「過去のある時のことが問題になっているとき、それよりまえに動作が完成したことをあらわすのに、完成相前過去形に相当する継続相過去形がつかわれる」(P.231)とする解釈は頷けるものではない。「みじかい時間差であっても、前後関係が問題になるとときには、このかたちがつかわれる」(P.231)という追加説明に正鵠を得たところがあると言えよう⁵。時間差の長短は観察の対象にする必要はないが。

3.7 もう一つの「存在」

ところで、(40-46)の用例を、シタを用いた文に直して見れば、シタ文とシテイル(シテイタ)文の違いは明確に看取される。殊にシタを用いた文は、出来事が発生したことを伝える発話姿勢が容易にうかがえる。(40-42)のシテイル(シテイタ)に出来事の発生したことを存在することとして伝える発話姿勢を読み取るのは、抽象的ではあるが、前節シ

テイルについて観察したのと同様に可能である。(43-46)も、「ちょっと振り遅れた」「正面を突いた」「わずかにバットに掠った」のようなシタ文と対比すれば、出来事の発生したことを伝える発話姿勢と違うのは容易に理解されるが、(43-46)のシテイル(シテイタ)に「存在」の意味を読み取ろうとしても、イメージが掴みにくいのではないかと思われる。

(43-46)の4例とも実況放送の用例である。出来事が解説と同時進行的に発生している状況を考えれば、話者も聴者も、出来事の発生と発話との間に時間的距離感のない状態で出来事の発生を目の前で見ている感覚で聞いているというイメージは理解されよう。つまり、話者について言えば、出来事の発生という局面の中にいる感覚で発話している、そういう発話状況が想像される。聴者側から見れば、その場にいてもいなくても、通常感覚では、聴覚情報によるイメージも含めて——目前で発生している出来事がシテイル(シテイタ)で発話された場合、話者の視点とともに聴者も出来事の発生の局面の中に身を置いている感覚になるのも想像できることであろう。このような想定のもとで考えると、この場合、発生を表わすシタに対立するシテイル(シテイタ)によってさしだされる発生の局面の中に、出来事の主体も、話者も、聴者もいる——すなわち、「存在」している、そういう状況をイメーすることはできないだろうか。

未発生と既発生を含めて、スル(シタ)のさしだす出来事の「発生」と対を成す、二者択一的に対立する関係性のみ価値を持ちうる概念として対置される「存在」、それをアスペクトの意味を表わす用語として提案しようとする。このような概念規定を受ける「発生」と「存在」は、互いに相手を前提とする一つの「全体」である。このような「全体」に依存する両者は示差的対立性、もしくは対立的関係性を本質とする抽象的で包括的な概念である。

4. 「シタ/シテイル」と「発生/存在」の検証

日本語のテンス・アスペクトは第二言語習得でも難しい文法学習の一つである。文法学習の教科書には典型的な用例が集められている。この節では砂川1986の用例について、完成相過去形のシタとの置き換えの可否、および意味の異同について観察し、上述の観点を検証してみる。ちなみに、以前事表現のシテイルの意味については「過去におこったできごとが、現在のできごととなんらかのかかわりがあるばあい(たとえば、経歴や記録としてのべられるばあい)」(p.35)と述べられていることから分かるように、砂川1986は高橋1985以前の研究を継承していると言えようが、ここではこれについての議論はしない。さて、砂川1986の用例(a-h)(p.35-36)を①～③に分けて考察してみる。

- ① シタへの置き換えが不可の用例
- ② シタに置き換えると、表現の論理が変わる用例
- ③ シタに置き換えると、レトリックの面で違いが生じる用例

① シタへの置き換えが不可の用例

a) (事故を起こした飛行機について、これまでの記録をしらべているとき)「記録によりますと、この飛行機は3年まえにも1度事故を起こしています。」

→ *起きました。

b) (ある事件との関係で、ある男のある日の足取りをしらべているとき)「これまでの捜査によりますと、事件当日、橋本は午前10時ごろ取引先に立ち寄っています。そこを出たのが11時ごろで、その後11時10分前後に駅前タクシーを待っているところを目撃されています。」

→ *立ち寄りました。 *目撃されました。

c) 「死因は何ですか。」

「睡眠薬です。プロバリンを大量に飲んでいます。」

→ *飲みました。

用例 a) における3年前の事故は事故機を特徴づける出来事、用例 b) における立ち寄ったことと目撃されたことは「ある男のある日の足取り」を特徴づける出来事、用例 c) における睡眠薬の大量服用は「死因」を特徴づける出来事として言及されていることに共通の特徴が見られる。発生した出来事は、存在するものとして、当面する事故機、足取り、死因を特徴づけ、評価する材料として言及されているのである。シタを用いた表現に変えると、発話意図が出来事の発生を伝えることになり、それぞれの文脈に合わない発話になってしまう。

ちなみに、これらの用例にシテイタを用いるのは表現論の面で言えば適切ではない。これらの用例のシテイルには特徴づけや評価を発話の動機とする積極的な発話態度を示す表現機能が見て取れるが、シテイタを用いると、当面している事故、事件への関与の態度が消極的なものになってしまう。

② シタに置き換えると、表現の論理が変わる用例

d) 彼はベテランの登山家で、エベレストの登頂にも成功しています。写真家としても有能で、今までに何回も受賞しています。

→ △成功しました。△受賞しました。

e) 山下教授をご紹介します。教授は古代史の権威で、これまでにすぐれた論文をたくさん発表していらっしやいます。

→ △発表されました。

f) 「このチームはつよいですね。」

「ええ。世界大会でも何回か優勝しています。」

→ △優勝しました。

(d-f) の用例は、過去に発生した出来事を、存在するもの、そこにある材料として出来事の主体を特徴づけ、評価することを意図した発話という点で (a-c) と共通する。しかし、

シタへの置き換えは不可ではないが、表現の論理が変わってしまう。シタに置き換えると出来事の発生を伝える表現になる点も重要な変化点であるが、シタを用いた文にした場合「彼」「山下教授」「このチーム」に対する特徴づけ、評価の意味合いは読み取れても、それを意図した表現ではなくなる。特徴づけ、評価の表現としては、間接的なものになる。最も大きな違いは、先行する評価の言葉と、それを裏付ける後続する出来事への言及の間の論理関係が変わってしまうということである。d) においては「ベテランの登山家」、「写真家としても有能」といった評価に対して、それらの評価を根拠づける事実存在として「エベレストの登頂成功」「数回の写真受賞」が言及されているのである。この論理関係の表明にシテイルが機能している。シテイルが選ばれる重要な理由である。「エベレストの登頂成功」と「数回の写真受賞」のとらえ方を完成相過去形のシタに置き換えた場合、この二つの出来事は「発生」の報告として言及されることになるため、「ベテランの登山家」だから、エベレストの登頂に成功したのであり、「有能な写真家」だから、数回の写真受賞を果たしたのだという因果の論理関係が変わってしまう。評価と根拠の関係から原因と結果の関係に逆転する。

用例 e) における「古代史の権威」と「すぐれた論文の多数の発表」も評価と根拠の関係にあるのだが、シタ文にすると、「教授は古代史の権威で、これまでにすぐれた論文をたくさん発表しました」という表現になり、原因と結果の関係に変わると言わないまでも、出来事発生の発話に変わり、後者の出来事が前者の評価を裏付けるという論理関係を明示する積極的な発話姿勢が読み取れなくなる。

f) においても、先行する「このチームはつよいですね」という発言に同調する事実根拠として「世界大会での何回もの優勝」が言及されているところにシテイルが選ばれる理由があるのだが、シタ文にすると、「世界大会での何回もの優勝」への言及は出来事の発生を伝える発話となり、強いチームだから、世界大会でも何回か優勝したという原因と結果の論理関係が変わる。

③ シタに置き換えると、レトリックの面で違いが生じる用例

g) (上司が出勤簿を見て)「君は今月に入って5日間も休んでいるじゃないか。これ以上休むのは遠慮してくれよ。」

→ ○休んだんじゃないか。

h) 「あのかたは東京大学の山下教授です。」

「ええ、しています。去年の学会で1度おあいしているんです。」

→ ○去年の学会で1度おあいしたんです。

この2例においても、シテイルの存在扱いとスルの発生扱いの対立は変わらないが、シタへの置き換えは許容度が高いと思われる。置き換えた場合の違いはレトリックに関わるものである。発生した出来事への言及が理由を述べるものであることにこの2例の共通する特徴がある。g) では「入って5日間も休んだ」という出来事に言及したのは「これ以

上休むのは遠慮してくれよ」という命令を発するためである。「休んだのだ」というように出来事の発生を表わす完成相過去形のシタに替えても、両者の論理関係には関与しない。h) のほうでも「去年の学会で1度お会いしている」という出来事は「知っていること」の理由付けである。「去年の学会で1度お会いした」のように、シタを用いて出来事を発生報告の扱いにしても論理関係には変化を来さない。

スルかシテイルかの選択は、表現の意図、効果、論理関係、修辞など様々な面で対立的関係を持つという一面も示されたが、対立的関係性を本質とする、「シル／シテイル」に対応する意味として「発生／存在」を見ようとする本論のとらえ方は、上掲用例の観察を通して解釈に有効であることが支持されたと考える。また、両者の違いを浮き彫りにするのにスルとシテイルを言語活動の実際において対比的に観察するのが、効果的な方法であることもこの節で行った対比的観察によって検証されたと言ってよい。奥田氏自身が意識していたか否かはともかくとして、奥田1977に徴する限りではこれがその出発点となるはずであったのではないかと筆者は考える。

5. おわりに

動詞のアスペクト論としてスルとシテイルの意味を観察し記述するという方法は言語活動という言語表現の実際におけるスルとシテイルの意味をとらえることはできないというのが筆者の主張である。スルとシテイルは文法形式であるため、言語活動という言語表現の実際の現場、すなわち文のレベル、発話の世界においてスルとシテイルその意味を観察することによって初めてそれが選ばれる理由を観察することが可能である。以前事に言及する際に用いられるシテイルの意味を、動詞のアスペクト論として動詞の語彙的意味特徴に基づく「完成相」「継続相」という理論で説明することができないのは、むしろ当然のことである。そのような認識に立って、本論では以前事言及のシテイル文をシタ文と比較することによって、シタ形が選ばれないのはそれが「発生」の意味を表わすためであり、シテイルが選ばれるのは表現対象である事象が「存在」することとして扱われているためだということを述べてきた。ここで強調しておかなければならないのは、シテイルの「存在」という概念は「発生」という概念を否定することに価値を持つものであり、そのことを本質とする概念だということである。その逆も然りで、スルの「発生」についても同様のことが言える。言い換えれば、「発生」と「存在」は互いに相手と対立する関係にある概念であり、両者が一つの全体を構成しつつ、この「全体」に依存する概念である。

以前事言及のシテイル文をシタ文と比較することによって観察されたこのような対立する関係にある概念としての「発生」と「存在」を、スルとシテイルに対応する最も包括的で、上位の概念と見ることができるかどうかは、実証的な検討が必要である。理論的な予想として仮説を示すとすれば、次のような図式で示すことができる。

スル「発生」－シテイル「存在」
シタ「既発」－シテイタ「既存」

動作の継続と変化結果の継続、および単なる状態は「存在」という概念の適応されるその外延的下位概念となる。

「反復」は文体等の違いを除けば、スルとシテイルのいずれでも表わすことができる。その理由は、「反復」を構成する(複数の)動作を表現する際の捉え方にあると考えられる。シテイルが用いられている(a)の場合、反復を構成する複数の動作は連続的な事象ととらえられ、その事象は発話時にすでにあるもの、つまり「存在」として扱われていることになる。シテイルが選ばれるのはそのためである。一方、スルが用いられている(b)の場合、「反復」を構成する複数の動作は断続的な事象ととらえられ、その事象は条件がそろえば起きるもの、すなわち「発生」として扱われていることになる。このような扱い方が許容されるのが、「反復」にスルが選ばれる理由である。

- (a) 太郎は休みの時いつも本を読んでいる。
- (b) 太郎は休みの時いつも本を読む。

以上はあくまでも理論的な予想としての仮定である。具体的な事例に照らし合わせ、解釈の有効性を検証しなければならない。

注

- 1 奥田 1977、高橋 1985、工藤 1995、須田 2010 を参照。
- 2 工藤 1995 はパーフェクトをアスペクトの派生(バリエント)としているが、須田 2010 はパーフェクトをアスペクトとは認めず、別にパーフェクトの体系を立てる。有田 2019 はそのような議論に触れず、従来の用語「経験・記録」を踏襲している。
- 3 「地面に花が散っている」が運動の継続ではなく、運動がもたらした結果の残存を表わすのは「地面に」という構文要素による述部の統語構造による。「一瞥している」が結果残存ではなく、経験の意味になるのは動詞の語彙の意味特徴によるのだが、「太郎は花子が現れるたびにこっそりと一瞥している」では反復の意味になる。
- 4 高橋 1969 と鈴木 1972 は「結果の状態」としている。
- 5 このような時間の前後関係に関わる表現形式として用いられるシテイル、シテイタについては、工藤 1995 はテキスト論のなかで「パーフェクト」として取り上げている。

参考文献

- 有田節子 2019 「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる3つの問い」(庵功雄・田川拓海編 2019)
 庵功雄・清水佳子 2016 『時間を表す表現－テンス・アスペクト－改訂版』スリーエーネットワーク
 庵功雄・田川拓海編 2019 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す－「する」の世界』ひつじ書房
 庵功雄・田川拓海編 2021 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す－「した」「している」の

世界』ひつじ書房

- 岩本遠億編著 2008 『事象アスペクト論』 開拓社
- 奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」(宮城教育大学『国語国文』8)
- 柏野健次 1999 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社
- 北原保雄編 1989 『日本語の文法・文体(上)』(講座日本語と日本語教育第4巻) 明治書院
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15号(金田一編 1976 所収)
- 金田一春彦 1955 「日本語動詞のテンス・アスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X(金春彦編 1976 所収)
- 金田一春彦編 1976 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 工藤真由美 1982 「シテイル形式の意味記述」(武蔵大学『人文学会雑誌』13.4)
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 嶋田珠巳・鍛冶広真編著 2021 『時間と言語』三省堂
- 鈴木重幸 1957 「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について——スルの形と——シテイルの形——」(金田一編 1976 所収)
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 砂川有里子 1986 『する・した・している』くろしお出版
- 須田義治 2010 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
- 高橋太郎 1976 「すがたともくろみ」(金田一編 1976 所収)
- 高橋太郎 1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(国立国語研究所報告 82) 秀英出版
- 高橋太郎他編 2005 『日本語の文法』ひつじ書房
- 張平 1991 「文末における現代日本語動詞のアスペクトについて」『世界の日本語教育』1
- 陳振宇 2007 『時間系統的認知模型と運算』学林出版社
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫 1992 『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版
- 日中対照言語学会 2002 『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 藤井正 1966 「『動詞+ている』の意味」『国語研究室』5。(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』1976, 5-26 むぎ書房 所収)
- 益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 2013 『日本語構文意味論』くろしお出版
- 町田健 1989 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 丸山圭三郎 1985 「ソシユール理論の基本概念」『ソシユール小事典』大修館書店
- 丸山圭三郎 1981 『ソシユールの思想』岩波書店
- 三原健一 2004 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
- 吉川武時 1976 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」(金田一編 1976 所収)
- 劉勳寧 2019 『中国語のテンス・アスペクトマーク“了”の研究』日本僑報社
- バーナード・コムリー 1988 『アスペクト』(山田小枝訳) むぎ書房
- ユーリー・S・マスロフ 2018 『アスペクト論』(林田理恵・金子百合子訳)